平成 22 年度

第 17 回おきなわ環境交流集会

事業報告書

沖縄県文化環境部環境政策課

1．おきなわ環境交流集会の目的

おきなわ環境交流集会とは、持続可能な社会の実現に向けて、沖縄県内における環境保全活動がさらに盛んになるための情報･意見交換や相互交流の場を提供しようと開催されているもので、17 回目を迎える今年度は以下の 4 点をねらいとしています。

①エコ活動（環境保全活動に限らず、広く環境に関わる活動）の発表を通じ、こどもエコクラブや小中学生・高校生、大学生が日頃のエコ活動を振り返る機会とする。
②社会に対して若い世代のエコ活動を発信する第一歩とする。
③客観的な評価を通じて、自分たちの活動の強み・弱みを把握し、エコ活動のさらなる活性化につなげる。
④参加者同士の交流により横のネットワークを拡大させ、新たな活動の芽生えを促進する。

2. おきなわ環境交流集会の概要

① 名　称：第 17 回おきなわ環境交流集会

② 日　時：平成 22 年 10 月 31 日（日）　※県民環境フェア in とみぐすくと同時開催

③ 会　場：道の駅「豊崎」駐車場　特設会場

④ 主　催：沖縄県

⑤ プログラム内容：

アイスブレイク【10 分】
初対面の参加者同士が打ち解け合える、体を使った簡単なゲームを行いました。

エコ活動発表コンテスト【100 分】
発表時間 10 分を目安として、こどもエコクラブや小中学生、高校生・大学生等の若者が日頃の活動発表を行いました。活動後には、審査委員としてお招きした専門家との質疑応答を行いました。コンテストは「こどもエコクラブ、小中学生の部」と「高校生、大学生の部」の 2 部門に分けて審査を行いました。

「環境」をテーマにしたワークショップ【40 分】
参加者全員で、「水」をテーマにしたワークショップを行いました。

エコ活動発表コンテストの審査発表およびふりかえり【15 分】
エコ活動発表コンテストの結果発表及び、各審査委員から講評をいただきました。

⑥ 参加者：

所　　属	大人	子ども・児童 生徒・学生	合計
サワヘビクラブ	2	11	13
沢岻学童クラブ	1	2	3
キリスト教短期大学 WLO サークル	-	3	3
辺土名高等学校サイエンス部	1	3	4
沖縄教育機関連携プロジェク TEAM Okinawa	1	9	10
沖縄尚学高等学校アイアーン沖尚	1	8	9
学生環境サークル EARTH☆FROGS（※発表なし）	-	4	4
南部農林高校バイオテクノロジー部（発表なし）	1	2	3
審査委員	4	-	4
一般来場者	30	10	40
ホールアース研究所　スタッフ	5	-	5
合　計	46	52	98

3. おきなわ環境交流集会の詳細内容

■安富雅之(沖縄県文化環境部環境政策課)挨拶

みなさんこんにちは。沖縄県環境政策課の安富と申します。本日は、第 17 回おきなわ環境交流集会にご参加いただき、誠にありがとうございます。本日、ここに参加されております皆さんは日頃から積極的に環境保全活動を実践されていると思います。今日の交流集会では、皆さんが普段実践されている活動を発表していただき、また、他の団体さんとの交流を深めることによって、さらに沖縄県の環境保全活動を活性化させていくことを目的としております。発表・審査・質疑応答を通しまして、さらなる活動のヒントを得ていただきたいと考えております。今日の交流集会を通して、多くの県民が積極的に環境保全活動を実践する契機となることを期待致しまして、挨拶とさせていただきます。

-エコ活動発表コンテスト-

10 分間を目安に各団体は発表を行い、その後各審査委員との質疑応答を行いました。単に発表することにとどまらないよう、審査委員には「突っ込んだ質問」をお願いし、活動発表に深みを持たせるよう心がけました。

■エコ活動発表コンテスト発表団体

「こどもエコクラブ、小中学生の部」

・サワヘビクラブ
・沢岻学童クラブ

「高校生、大学生の部」

・辺土名高等学校　サイエンス部
・沖縄教育機関連携プロジェクト　TEAM Okinawa
・キリスト教短期大学　WLO サークル
・沖縄尚学高等学校　アイアーン沖尚

■審査委員

琉球ジャスコ株式会社　総務部　環境・社会貢献課　課長	上原　美佐緒　氏
NPO 法人まちなか研究所わくわく　理事長	小阪　亘　氏
やんばる自然塾　コーディネーター	島袋　裕也　氏
沖縄県文化環境部環境政策課　課長	安富　雅之

■サワヘビクラブ　活動発表

****

私たちは沖縄本島から西に約 100km、沖縄では 5 番目に大きな久米島という島に住んでいます。この島で、私たちはキクザトサワヘビやクメジマボタルを守る活動をしています。久米島ホタル館を活動の拠点とし、平成 19 年度から始まったサワヘビクラブの活動には、久米島の 3 つの小学校と、2 つの中学校、合わせて 32 人が参加しています。毎週土曜日に蛍館に集まり、久米島の里山に出かけます。そこでは、サワヘビやホタルにつながる、たくさんの生き物に出会います。ホタル館館長と、久米島ホタルの会のみなさんや、ボランティアで講師をしてくださる多くの先生方や、お年寄りの方々に指導していただき、次のような活動を行っています。

1. **川の生き物調査**

毎年、サワヘビやホタルが棲む川の生き物調査をしています。水がきれいになれば、たくさんの生き物が棲めること、ひどい汚れでも頑張って生きている生き物がいることを知りました。

2. **地域の清掃活動**

出かけた先の海や川、森では必ず清掃活動を行なっています。

3. **棚田や湿地のメンテナンス**

ホタル館周辺などで、水質が良くなるようにつくられた棚田や湿地のメンテナンスを手伝っています。棚田や湿地では、微生物と小さな生き物、植物が、浄化の大切な役割を担います。浄化力が大きいと言われる、手作りの田んぼも手伝っています。その活動の成果あり、ホタル館周辺は環境が良くなり、ホタルの鑑賞地として知られるようになりました。

4. **キクザトサワヘビの保護活動**

サワヘビや、サワヘビのエサのサワガニを食べる外来種のブルーギルやティラピアを退治するため、食と結びつけた、釣って食べる活動を行なっています。

5. **自然体験活動**

さまざまな里山環境を知るために、洞窟探検、リバーウォック、ネイチャーゲーム、冒険塾などのアウトトレッキングも行なっています。

久米島はとても小さい島です。私たちは、この島の自然を壊し続けていくことよりも、サワヘビやホタルのように、久米島に昔から暮らしてきた生き物たちの小さな声に耳を澄まし、自然に優しい暮らしを大切にする活動をこれからも続けて生きたいと思います。2010 年度からは、キクザトサワヘビや久米島ホタルのぬいぐるみを使って、環境を知るための人形劇も始めました。今日はこの人形劇を披露します。

～人形劇あらすじ～

梅雨が始まる頃、いつものように川遊びをしていた子どもたち。そこへキクザトサワヘビが流されてきた。「もしかしてこのサワヘビは、僕たちに何か伝えたいことがあるのかな？サワヘビの言葉が分かればいいのに･･･。」子どもたちは、キクザトサワヘビが何度も流されてくることを不思議に思いながら、川の源流へサワヘビを帰した。数日後、子供たちが森で遊んでいると、大きな黒いハブが現れ、仲間を助けてくれたお礼にと、２人に動物の言葉が理解できるようになる「聞き耳頭巾」を授ける。聞き耳頭巾を手に入れた２人は、ホタルやキクザトサワヘビから、人の生活が、豊かな自然の恩恵を受けていたことを知る。そのやりとりを見ていた人間たちも、人も自然の一部であり、つながりの中で生きていかねばならないことに気づき、自然とともに生きていくことを誓う。

◎質疑応答

小　坂：素敵な人形劇ありがとうございました。完成度の高い人形劇ですが、どのようなところで発表しているのですか。

発表者：久米島では、みんなが集まるときなどに発表します。主に、沖縄本島や本土などに出て発表することが多いです。北海道で発表したこともあります。

上　原：とても分かりやすい人形劇でした。身近な動物を使いながらうまくまとめていました。このストーリーはみなさんで作られたのですか？それとも誰かと協力してつくったのでしょうか。

発表者：人形劇の内容はホタルの会と方々と一緒に考えました。人形はホタルの会の方々につくっていただいて、それを使い私たちが練習して発表しています。

上　原：みなさんは小学生の方もいれば、中学生の方もいるという集まりのようですが、このクラブはどういった集まりになっていますか。

発表者：ホタレンジャーには小学生と中学生が参加していて、サワヘビクラブには小学生が参加しています。ホタレンジャーは週に一度、土曜日に活動しています。また、月に一回、サワヘビクラブの方々と合流して、いろんな活動を行なっています。

上　原：1 つのクラブだけでなく、多くの、地域の方々やホタレンジャーなどの別のクラブが一緒になってやられている、今日の人形劇ということですね。ありがとうございました。

■沢岻学童クラブ

****

沢岻学童クラブでは、毎年 4 月に自然体験学習を行なっています。自然に触れ、生き物に触れ、体験の中でエコ活動を心がけています。その中の体験活動をご紹介します。

1. カヌー体験

やんばるの自然の中でカヌー体験し、マングローブについて学びました。マングローブは海の水と川の水が交じり合っているところでしか育たないこと植物だということが分かりました。

2. マイ箸運動

体験学習時には、毎回ゴミを出さないように、みんながマイお箸、マイお皿、マイコップを使っています。帰る時は、「来た時よりも美しく」を心がけてみんなで清掃します。夏の思い出に、学童のみんなでビーチパーティーをしました。その際も、マイお箸、マイお皿、マイコップを使いました。ビーチパーティーの参加人数は 40 人近くいましたが、最後に出たゴミは少しだけでした。

3. 地域の清掃活動

夏休みには、私たちが毎日遊んでいる広場の周辺の、神社の清掃をしました。たくさんのゴミが神社の前に捨てられているのを見て、とても悲しくなりました。それからは週に 3 日は、神社でゴミ拾いをしてから広場で遊んでいます。

4. 学童子ども祭り

沢岻学童クラブでは、毎年、学童子ども祭りがあります。景品は新しいものではなく、それぞれが遊ばなくなったおもちゃやぬいぐるみを再利用しています。

5. 命を考える

浦添青年会議所事務局の主催をする浦添寺子屋で、「命を考えよう」をテーマに、「私の命のために動植物の命をいただきます」を学んできました。〆た鶏をカレーに入れて、みんなで感謝していただきました。ここでは、命の大切さを学びました。

6. 川の水質調査

毎年、川の水の調査もしています。パッチテストで川の水のきれいさを学びました。川の水が海に流れ、そこにもいろんな生き物たちが育ち、棲んでいるということを学びました。

以上が、私たち沢岻学童クラブが体験してきたことです。このたくさんの体験を通し、「自分たちのできることから始めよう」をテーマに頑張っています。

◎質疑応答

安　富：皆さんは大勢の学童の方で活動をされているということで、環境保全に大変効果があるのではないかと期待しております。その中で、川の水質調査を行なっているとありましたが、どのような項目をどのような形で調査されているのでしょうか。

発表者：川の中に入って、そこに棲んでいる生き物の種類を調べて、どのぐらいきれいかを調査しました。

島　袋：年間を通じていろいろな活動をされているということですが、自然体験や、命を考える活動を経験したことで、日々の生活で何か変わったことはありますか。

発表者：（ごはんを食べる時は）ちゃんと感謝をして「いただきます」を言うようにしています。

■辺土名高等学校　サイエンス部

****

私たち辺土名高校サイエンス部は、2007 年からヤンバルクイナ、ノグチゲラ、アカヒゲの分布調査を開始し、今年で 4 年目になります。調査方法にはプレイバック法*を用い、さらに過去のデータと比較して、本島北部一帯における 3 種の生息分布の推移を調査しました。また、県が出している最新の植生データを調査に使いやすいように改良し、そのデータと照らし合わせて、3 種の分布状況と植生との関連について考察しました。

*プレイバック法
音声再生装置を使ってヤンバルクイナ・ノグチゲラ・アカヒゲの鳴き声を再生し、その反応をみる方法。聞こえた鳥の声の種類、方角、距離を記録し同個体か別個体かを判別する。

3 種の分布調査と植生との関連についての考察

1. ヤンバルクイナ

2007 年、2008 年の調査では、大宜味村ではヤンバルクイナの生息を確認できませんでしたが、2009 年の調査では、大宜味村饒波付近で生息を確認することができました。3 年間で分布の南限地が大宜味村饒波まで南下してきたと考えられます。植生との関連については、県道 2 号線にかけての、イタジイ二次林で多く確認することができました。比地川上流部で、少数ですが、定着しているようです。また、本来は大宜味村でも十分に生息可能だと考えられ、今後、マングースなどの駆除が進み、外敵による捕食から守ることができれば、生息域が南に広がると予測されます。今年の調査結果では、大宜味村、田嘉里付近でも確認することができました。次第に生息域が南下してきていると考えられます。

2. ノグチゲラ

大宜味村内の分布状況にはほとんど変化はありませんが、生息確認数はやや減少傾向にあります。2009 年の調査では、県道 2 号線沿いでは生息確認数が半減しています。

植生図から、巣を作るために必要なイタジイ自然林や石灰岩林など豊かな森に依存していると考えられます。昨年、名護岳でメスのノグチゲラが確認されました。しかし、大宜味村南部から東村では、耕地化が進み、飛来する個体はあっても、生息域を南下させることは困難であると思われます。分布拡大のためにも、イタジイ林の保全が重要です。

3. アカヒゲ

アカヒゲは 3 種の中で最も生息状況が良く、生息確認数もほぼ横ばい状態で、分布域も特に

3 年間で変化はありませんでした。また、植生との関連については、イタジイ優占林、リュウキュウマツ林、石灰岩林など、多くの調査地で生息を確認することができました。しかし、住宅地や耕作地では確認されず、アカヒゲも先ほどの 2 種と同様に、豊かな森が必要であると考えられます。以上の事から、分布域が南下するのは困難だと考察されます。

アカウミガメの産卵と孵化

辺土名高校サイエンス部は、地域でウミガメの保護活動を行なっている方と一緒にウミガメの産卵や、孵化を観察し、その保護活動を行なっており、最近では大宜味村の饒波海浜にて、アカウミガメの産卵・孵化を観察しました。沖縄本島ではほぼ全域でウミガメの産卵が観察されています。その中でも、国頭村、大宜味村、東村で、産卵が多く観察されています。

産卵、孵化の障害となる主なものは、オカヤドカリ、オカガニ、アカマタなどの天敵や海岸近くの街灯（孵化直後のウミガメは、明るい方へ移動する）やエサと間違えられるビニールなどが挙げられます。

貴重なやんばるの自然の現状を知ることが環境保全につながっていくと思うので、今後も調査を継続していきたいと思います。

◎質疑応答

安　富：大変貴重な記録であると思います。ウミガメについて、3 種の特徴など、今日初めて知ることができました。ありがとうございました。ヤンバルクイナとノグチゲラの調査についてですが、鳴き声で調査をされているということですが、姿なども確認できているのでしょうか。

発表者：調査中にも鳴き声だけではなく、その姿も何度か目にしています。ヤンバルクイナについても今年に入って、調査中に 5～6 回は見ています。

小　坂：ヤンバルクイナとノグチゲラの調査で、おそらくマイクなどを設置したりしていると思うのですが、調査方法などについて地域の方と連携していることがあれば教えてください。

発表者：調査方法はテープレコーダーで流しながら移動して行なっているので、特に機器を地域に設置したりはしていません。

小　坂：どの時間帯にどのルートを周るのかなど、ルートを選ぶ基準は何かあるのでしょうか。

発表者：朝の 7 時から 10 時くらいの時間帯に、マングースの罠を設置している場所の近くでテープを流し、調査を行なっています。

■沖縄教育機関連携プロジェクト
Team Okinawa

****

私たち Team Okinawa は、2011 年に行なわれるオーストラリア大陸南北 3000km を縦断するソーラーカー競技ワールドソーラーチャレンジへの出場を目指す、沖縄の中高大教育機関連携プロジェクトです。

Team Okinawa 方針

1. 自ら考え、自ら動き、自分たちの力でやる。
2. 分からないときは自分たちで必要な人に聞く。
3. 自分たちにできないことは自分たちで協力を依頼する。

この方針の下、Team Okinawa はレース活動のみならず、学生が主体となって、以下の取り組みを行なっています。

1. 資金造成活動

私たちは設計から資材調達、加工、製作を自分たちの力で取り組みます。また、チームスタッフである学生が中心となって、支援者を募ったり募金活動を行なったりと、活動や車両製作に必要な資金調達に取り組みます。

2. PR 活動

インターネットの利用、マスメディアの協力、学生による活動報告プレゼンテーションなどを行なうなどの PR 活動を行ないます。

3. 環境啓発活動

保育園の児童から中学生までを対象に、高校生が講師となって、環境教室の出前授業を実施しています。琉球大学付属小学校では、「地球環境とエネルギー」をテーマに講義を行ないました。

私たちの活動は、指導してくださる先生方、家族、学校の先生方、地域、企業の方々など、多くの方々のご協力に支えられています。沖縄の誇りをかけ、自分たちの走りが地球の未来を変えることにつながると信じ、世界に挑みます。自分たちの技術で、世界の強豪チームと互角に渡り合えるよう、また、応援してくださる皆様に恩返しができるよう、チームスタッフが互いに高めあいながら、最高のマシンとチームを作っていけるよう全力で努力していきます。どうぞ Team Okinawa の応援をよろしくお願いいたします。

◎質疑応答

島　袋：目標に向かって活動することで、自身の成長を感じているということが発表を聞いていて分かりました。Team Okinawa のスタッフは何名ほどいるのでしょうか。また、現在、技術部という部活で活動されているとのことでしたが、中学生の方との具体的にどのように関わっているのでしょうか。

発表者：中学生で主に活動しているのは一人です。高校生は 8 名（1 年生が 4 人、2 年生が 3 名、3 年生が 1 人）です。顧問の先生、琉球大学の教授の方も参加します。中学生には、主に週末の土日に南部工業高校に来ていただいて、作業をしていただいています。

上　原：みなさんの活躍はいつも新聞やテレビなど、いろんな場面で拝見させていただいています。発表の内容も学生さんとは思えないようなしっかりした内容で、活動を通して、みなさんが日々成長されていることを実感しました。今までの活動の中で、一番苦労した点と、今後の課題について教えてください。

発表者：これまでの活動の中で、大変だった事はたくさんあるので、どれが一番苦労したのかというのを挙げるのは難しいのですが、一番悔しかった思い出は、今年の 8 月に三重県の鈴鹿サーキットで開催されたソーラーカーレースです。車両の製作が予定よりも遅れ、未完のまま車両を現地に搬入し、ほとんど徹夜の状態で作業をしました。完成したのは決勝レースの 2 日前でした。もしかしたら製作が間に合わないかという不安の中での作業はきつかったです。今後の課題は、余裕を持って作業に取り組むことです。今年のように、余裕のない製作スケジュールになると、車両に何が起こるか分かりません。限界近くのスピードで走った時に安定して走れるかどうかなども分からず、そのような状況でレースをするのは非常に危険です。余裕を持って車両を完成し、どんどん走りこんで課題を見つけて乗り越えていく、というところが私たちに今足りないところです。

■キリスト教短期大学　WLO サークル

****

サークル名の WLO は We love Okinawa の略称です。私たちは沖縄の美しい自然を残していけるように月に一度、クリーン活動を行なっています。現実を知ることで、意識を変えるきっかけになってほしいと考え、活動しています。

大国林道でのクリーン活動

乾電池やバッテリー、冷蔵庫、洗濯機などの家電など、多くの生活ゴミが、山の隠れた部分に捨てられている現実を目の当たりにしました。中にはゴミ袋ごと捨てられているものもあり、意図的に捨てられていると感じました。ゴミは錆びたものも多く、生態系への影響も心配です。

公園などの公共施設でのクリーン活動

食べ終わった弁当の空き箱がたくさん捨てられていました。また、空気が抜けたボール、使えなくなった一輪車などのゴミもありました。公園に遊びに来た人がゴミを捨てていく傾向があります。

海でのクリーン活動

私たちは、砂浜ではなく、主にテトラポット内のクリーン活動を行なっています。一見きれいに見える海も、テトラポット内にはたくさんのゴミが捨てられています。古いゴミも多く、異臭を放っていました。自転車などのゴミもあり、意図的に捨てられていると考えられます。

伊江島ワジーでのクリーン活動

一見きれいに見えますが、人目につかない奥の岩場はゴミで埋め尽くされていました。船からのゴミ、細かいガラスの破片、発泡スチロールやタンク、ペットボトルなどの漂着ゴミが多く、中には中国や韓国からの漂着ゴミも多く混じっていました。

（伊江島出身の発表者）「地元出身の僕はタッチューと、きれいな海が自慢でしたが、活動に参加して、初めてこのような状況にあることを認識しました。」

これまでの活動で、私たちは人とのつながりを大事にしてきました。これらのクリーン活動で拾ったゴミの回収は地域の行政にお願いしています。できるだけ多くの地域に協力していただけるよう、ゴミの量や状況を伝えるための報告書を作成し、市役所や管理局へ提出しています。また、HP 等で活動状況を報告し、できるだけ多くの方にこのような現状を知っていただけるように取り組んでいます。

クリーン活動を通して

テトラポット内のゴミの現状を目の当たりにするなど、このような活動を通して、本当の沖縄を知ることができました。大量のゴミは清掃活動がなければ増えていくのみです。何度クリーン活動を行なっても、数ヵ月後には元通りになっていたりして、改めて難しい問題だと感じました。しかし、活動を続けているうちに少しずつですがゴミが減った場所もあります。宜野湾市のトロピカルビーチのテトラポット内も、かつては大量のゴミで埋め尽くされていました。しかし、サークルメンバーを始め、たくさんの人々のご協力もあり、今では拾う場所がなくなるぐらいきれいになりました。また、私たちの活動を見て、通りすがりの人がありがとうと声をかけてくれたり、困っている私たちを見て手伝ってくれる方もいました。中には親子でクリーン活動に参加してくれる方もいました。私たちの活動を見ていただいていることを知り、嬉しく感じました。

今後の活動について

WLO の活動は今年で 5 年目になりますが、今後の課題は、継続的に活動を続け、後輩に引き継いでいくことです。メンバーの多くが保育科の学生であり、卒業後は保育所や幼稚園など、子どもと関わる職業に就きます。子どもたちが安心して暮らせる地域を目指し、自然を大切にすること、公共施設を大切にするなど、大事な心を育てていきたいと考えています。それが沖縄の自然を残すことにつながると考えています。まずは将来先生となる学生が沖縄の現状を知るきっかけとして、このサークルを存続させていきたいと考えています。

◎質疑応答

小　坂：5 年間の活動で、具体的なゴミ数量の数値はとっていますか。また、年間何箇所で活動を行なっていますか。

発表者：今のところ分析して統計などは出していません。私たちの活動は 2 時間程度の短時間で行なうものですが、それでも一回につき 20 袋程度のゴミを拾います。月に一度の活動なので、年間で 12 回の活動を行っています。場所については毎年同じ場所で行っているケースもあります。北谷はゴミが多いので何度か行っています。大国林道は 3～4 回行きました。

安　富：みなさんの回収されているゴミは、大国林道では不法投棄、また、海岸への漂着ゴミは中国・韓国あたりから漂着していると思いますが、その量は莫大なもので、あなたたちだけの活動では難しいと思います。できるだけみなさんの活動を PR して、活動する方を増やすことが大事だと思います。HP も含めて、たくさんの県民の方に紹介できるように取り組んでいただきたいと思います。

発表者：ありがとうございます。私は伊江島の出身なのですが、見ていただいた通り今回、かなりのゴミの量だったので、どうしても私たちの活動だけではとても追いつかないと感じました。今後は、地元、伊江島の村民を巻き込んで取り組んでいければと考えています。

■沖縄尚学高等学校　アイアーン沖尚

****

アイアーンとは

世界 125 カ国の学校をつなぐ世界最大の共有学習ネットワークです。年に一度、世界中のアイアーンが集まり世界大会が開催されます。大会では各チームが一年間の活動内容を発表・意見交換を行ない、今後の活動に活かしていきます。

アイアーン沖尚の「エコかっこいい活動」

アイアーン沖尚では、次に挙げる環境保護活動を「エコカッコイイ活動」として推進しています。

1. **エコキャップ活動**

ペットボトルのキャップはゴミとして捨てると、400 個で 3,150g の CO_2 が発生します。私たちは、このキャップを集めてリサイクル業者に持ち込んでいます。工場でキャップはマテリアルボードというものに変わります。マテリアルボードを売ってワクチン代として寄付しています。

2. **ゴミ分別活動**

ゴミの分別を推進するポスターを校内に掲示し、月 2 回、売店前にてゴミの分別を行ないました。私たちが率先して分別を行うことで、生徒一人一人の意識が高まり、3 年前は分別されていなかったゴミも、今ではちゃんと分別されています。

3. **エコバック推進活動**

エコバックを持つことをみんなに定着させるために、ポスターを掲示したり、オリジナルのエコバックをつくり学園祭で販売したりしました。エコバックを使うことで、石油から作られているレジ袋を削減することができます。また、割り箸や紙コップの代わりに、マイ箸・タンブラーも常備しています。

4. **GREEN WALL（グリーンウォール）活動**

地球温暖化を身近な問題として捉え、実行していくことが重要だと考え、GREEN WALL*活動を始めました。一つの教室で GREEN WALL が成功しています。

*GREEN WALL（グリーンウォール）

ゴーヤーなどのつる性の植物を窓の外に這わせた自然のカーテン。夏の強い日差しを遮り、葉の蒸散作用により、周囲の温度を下げ、室温の上昇を防ぐ効果がある。

◎質疑応答

上　原：オリジナルエコバックをつくって学園祭で販売したということでしたが、販売で得た利益などは、どのように使われているのでしょうか。

発表者：地震があった災害地などに寄付しています。

上　原：アイアーンには世界大会があるとの事でしたが、世界大会でも今回のような発表を行っているのでしょうか。

発表者：世界中の国々にアイアーンの組織があり、いろいろな活動を行なっているので発表内容も様々です。平和に関する活動として、戦争に関する紙芝居をつくって発表している団体もありました。自分たちの取り組みについて情報を発信し、意見交換をします。

上　原：毎年、チームが違うということでしょうか。

発表者：（顧問の）先生がアイアーン JAPAN のリーダーで、毎年先生の受け持つ生徒がチームとして大会に参加します。発表するテーマも環境や平和など、年によって異なります。

浅　子：グリーンカーテンが一箇所だけ成功したとの事ですが、そのグリーンカーテンを導入した部屋と別の部屋では、体感で温度は変わりますか。

発表者：グリーンカーテンが成功したクラスでは、「日差しがさえぎられて、クーラーを入れなくても部屋が涼しくなった。」という感想が聞かれました。

■採点基準

審査委員は、次に掲げる事項に関し、各項 5 点満点の計 30 点満点で採点し、最優秀賞を決定しました。最優秀賞に選ばれた団体には、副賞として図書券が贈呈されました。また、最優秀賞に選ばれなかった団体にも、それぞれその団体の活動に適した名前の賞を授与いたしました。

＜こどもエコクラブ、小中学生の部＞

主体性	活動に対する子どもの主体性など
連携	地域の人々等とのつながりなど
将来性	活動の持続可能性や発展性
地域性	沖縄の文化や自然との関連性、沖縄ならではの活動の工夫など
プレゼンテーション	プレゼンテーションの出来栄え
とにかく好き！	細かいことは抜きにして、直感的に好き！

＜高校生・大学生の部＞

若者らしさ	学生独自の着想や、楽しんで取り組む雰囲気など
連携・協働	地域住民や行政や企業など、多様や主体とのパートナーシップ
将来性	活動の持続可能性や発展性
地域性	沖縄の文化や自然との関連性、沖縄ならではの活動の工夫など
プレゼンテーション	プレゼンテーションの出来栄え
とにかく好き！	細かいことは抜きにして、直感的に好き！

■審査結果

＜こどもエコクラブ、小中学生の部＞

最優秀賞	サワヘビクラブ
生き物の大切さを知ったで賞	沢岻学童クラブ

＜高校生、大学生の部＞

最優秀賞	沖縄教育機関連携プロジェクト TEAM Okinawa
生物多様性を考えてるで賞	辺土名高等学校 サイエンス部
沖縄をきれいにしてくれるで賞	キリスト教短期大学　WLO サークル
「グローカル」に楽しく活動してるで賞	沖縄尚学高等学校　アイアーン沖尚

おきなわアジェンダ２１

■審査委員講評

上原:参加していただいた 6 チーム全てに優秀賞をあげたいぐらい甲乙のつけがたい発表ばかりでした。小さな活動から世界的な活動まで、本島に幅広い活躍をされていて、私たちにとっても大変勉強になりました。改めて環境について考えることが出来た、良い発表会だったと思います。今年は生物多様性の年でもあり、生物に関する発表が特に多かったように感じています。出来る活動から行なっていくことはもちろん、是非ここにいる皆さんが、周りにその活動を伝えていって、ますます環境や生物多様性について取り組んでいけることを期待しています。今日の取り組みを今後の活動の糧とし、夢を持って活動してください。

小坂：私自身が NPO の活動支援を行なっているので、その視点で講評させていただきます。今回発表していただいた皆さんの発表はどれも引けをとらないものでした。それぞれの活動がそれぞれの地域や問題に向き合いながら、状況に応じて活動を展開していると言う点がとても素晴らしいと感じました。小学生、中学生、高校生などの若い時代から、このような地域の問題に向き合って活動することが、今後、その地域を元気にしたり、地域の力になったりしていきます。ここまで来るのにも一生懸命活動されていたと思いますが、是非、今後も継続してこれまでの活動に取り組んでいってください。

島袋：「環境」という一つのテーマであっても、それに対する切り口が異なっていて、非常に興味深い発表でした。環境というものを考える上で様々な分野があることを改めて実感しました。一人ひとりの活動が大きな力になっていくと思いますので、是非これらの活動を続けていってください。さらなる波及効果を期待しています。

安富：私からは最優秀賞を受賞した 2 団体について講評したいと思います。

サワヘビは 10 年前に種の保存法の指定を受けています。当時は生きたサワヘビが確認されず、絶滅したのではないかと言われていました。しかし、現在、サワヘビクラブさんの方でも生体を確認されているとの事で、みなさんの活動の成果が現れているのではないかと感じました。人形劇では森の自然から水田、川、家へと繋がるような生態系の大切さについて、大変分かりやすく説明されており、専門家の講義よりも効果があるのではないかと期待しています。是非今後も精力的に活動を続けていってください。

Team Okinawa はソーラーカーの開発につきましては、高校生レベルを超える技術で製作されていると感じました。現在、地球温暖化問題が叫ばれていますが、沖縄におきましては CO_2 排出量が年々増えていると言われており、およそ 1,400 万トンの排出量となっております。その中でもやはり運輸部門の排出量が最も多いという事ですが、ソーラーカーは CO_2 を排出しない究極のエコカーであり、Team Okinawa の皆さんには、是非実用化を目指してほしいと期待しています。

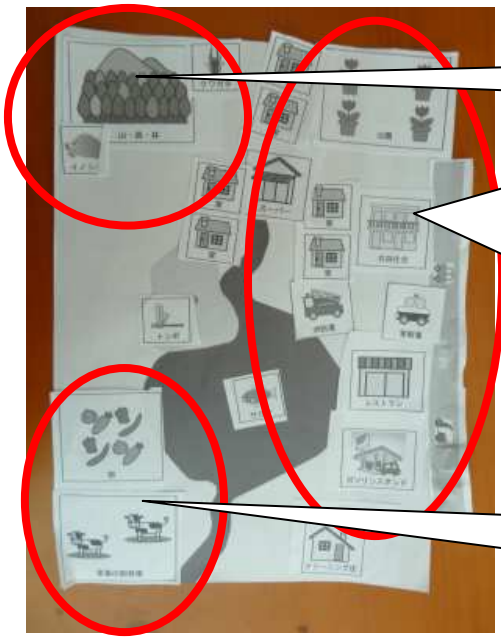
-「環境」をテーマにしたワークショップ-

■「水」をテーマにしたワークショップ　みんなのとんぼ池

池の絵が描かれた紙の上で、住民、市長、警察、農家、工場主、商店主、動物（魚・イノシシ・トンボ）など、立場の異なる人（生物）たちに扮して、トンボ池周辺に作りたい建物や施設を配置していき、貴重な生物が生きる湿地周辺の土地利用について考えました。小学生から大学生までの参加者を混成した 4 つのグループをつくり、それぞれのグループ内でワークを進めました。ワークでは、特にいろいろな世代からの意見が出るよう、ファシリテーター役が適宜コメントや意見を求めるなど、進行に工夫をしました。最後に各グループ内で意見をまとめ、自分たちが最適と考える街づくりを発表しました。

1 グループの街づくり

1 グループの町づくりのポイントは、自然への悪影響が少なくするということです。河の上流にある自然から、市街地を離し、人の生活に必要なものは市街地に集めています。町づくりのキャッチフレーズは「クリーンタウン」です。



自然ゾーン

- 川の上流にきれいな自然や動物を配置

市街地ゾーン

- スーパーやレストランなど、生活に必要なものをまとめた
- クリーニング店からは排水が出るので、下流に配置した
- きれいな自然が残っている川の上流には公園を設置し、自然を楽しめるようにした

農業・酪農ゾーン

- 畑・家畜などは臭いがあるので、人の生活圏から離し、下流に配置した

2 グループの街づくり

私たちの街は昔洪水があったと仮定し、川の周辺には建物を何も建てないようにしました。また、自然への影響を少なくするため、川を境に自然区域と市街地を分け、高速道路で行き来できるようにしています。

3 グループの街づくり

私たちの街のコンセプトは、「安全に暮らせる街」です。環境に配慮し、自然環境を残すため、川を埋め立てずに高速道路を作りました。家畜の糞尿を肥料に使い、微生物を使って川の浄化をします。クリーニング店は住宅街の近くに置きたかったのですが、自然を壊すかもしれないという意見が出たので、あえて住宅街から離しました。

自然ゾーン

・ 川の上流に自然や生き物を配置し、自然環境を守れるようにした

高速道路

・ 川を埋め立てず、高速道路（橋）を設置した

クリーニング店

・ 排水の問題を考え、河口にある住宅街からあえて離して配置した

農業・酪農ゾーン

・ 家畜の糞尿を肥料として活用し、有機栽培を行なう。また、微生物を用いて排水を浄化する

自然ゾーン

・ 河口に市街地を配置した

4 グループの街づくり

「自然保護公園のある街」をテーマに街づくりを行ないました。貴重な自然を守るため、トンボの棲む湿地周辺を自然保護区としました。また、保護区内にある公園では、保護下にある貴重なトンボを見ることが出来ます。上流にある保護区の自然を壊さぬよう、人の生活圏は川の下流に配置しました。野生動物（イノシシ）に田畑を荒らされないよう、両者を離して配置しました。

自然保護区

- 川の上流の貴重な自然を守るため、トンボの棲む湿地周辺を自然保護区とした
- 保護区内にある公園では、貴重なトンボを見ることが出来る
- イノシシに畑や牧場を荒らされないよう、畑から離し、山の奥に配置した

市街地

- 上流の自然を壊さないよう、市街地は川の下流に配置した

農業・酪農ゾーン

- 家畜の糞尿を肥料として活用し、有機栽培を行なう。また、微生物を用いて排水を浄化する

ワークショップふりかえり

発表後、各グループの街に流れる川をつなげてみます。すると、各グループのつくった街は、川を通じて実はつながっている事に気づきました。自然を大切にする時には、一つの街という狭い視点だけでなく、それぞれの街全体を見る、ひいては地球全体を見るということが大切だと思われます。地球全体のつながりを考えた街づくりの重要性を、生活の中心である「水」の観点から考える時間となりました。

平成 22 年度　第 17 回おきなわ環境交流集会
事業報告書

沖縄県文化環境部環境政策課
沖縄県那覇市泉崎 1-2-2
TEL 098-866-2183　FAX 098-866-2240

作成：ＮＰＯ法人ホールアース研究所沖縄事務所
沖縄県名護市真喜屋 845
TEL/FAX 0980-58-3536
Mail:okinawa@wens.gr.jp